

KOMPEITO

[コンペイター]

創刊号

VOL.01

[2025.3発行]

**TAKE
FREE**

ご自由
にお持ち帰りください

別府発！
キラキラ笑顔が詰まった
インクルーシブな
まちの情報誌

小さな一粒から大きな物語へ
大分・別府でかがやく「ひと」

※本冊子は、令和6年度別府市市民活動支援補助金の助成を受けています。

丸投げ
OK!!

業界最安値水準

SEO記事・取材記事・コンテンツ記事・文字起こしなど…

格安記事作成代行

- MokuMoku -

1文字

2.5円～

1記事

18,000円～

MokuMokuのサービス特徴

初期費用

0円(無料)

単月更新OK!

1ヶ月～

お試し発注OK!

1記事～

オールジャンル対応可能

MokuMokuでは専門性の高いジャンルから、
流行、ニッチなものまで幅広く対応しています。

金融

美容

健康

不動産

AI

市場調査

物流

法律

飲食

教育

人権・福祉

介護

その他の専門分野もお気軽にご相談ください！

詳しい情報は
こちら



自宅で学び、ライターとして新しいキャリアへ もくもくライ터スクール 受講生募集中!

文章を書くのは好きだけど、仕事に繋がらない

自分に合った働き方が見つからない

就職もフリーランスも不安だらけ

ライターとして働くためのノウハウが学べる教材を約50本提供！
さまざまな“書く仕事”につながるカリキュラムを充実させています。

わたしらしく働ける“居場所”をすべての方へ!

登録無料! 学べるカリキュラムは
下記バーコードよりご覧ください。



入学金無料! 1コンテンツ
330円からの低価格!



メディアサイトで
実績を積める!



ライタープロダクションに
所属して働ける!



特定非営利活動法人こんべいとう企画

大分県別府市弓ヶ浜町1-28 別府コージェマンション 301
電話: 0977-76-8601 WEB: <https://kompeito.org/>

「福祉×暮らし」のインクルーシブタウン情報誌 コンペイトー創刊

「障害の有無にかかわらず、いろんな人が同じ町で、ともに暮らしている」
これまでフォーカスされてこなかった、そんな当たり前のことに
気づき、考え、思いを伝える機会を作りたい——。
大分・別府で活動する障害当事者や、それを取りまく人の声、
インクルーシブな視点を取り入れた観光・暮らし情報を発信する、
「誰もが自分らしく生きる地域社会」のための
タウン情報誌『コンペイトー』が誕生しました。
地域に根ざし、そこに生きる人々の思いに耳を傾けながら、
いろいろな立場の人たちがつながるきっかけを作る、そんな一冊をお届けします。

CONTENTS

03	小さな一粒から大きな物語へ 新たな未来地図を障害当事者の手で描く	豆塚エリ
06	思わず頬がほころぶこだわりのクッキー	べっぴん優ゆう
08	最高の一杯をつくるために	或る焙煎所
10	【十人十色】 別府で見つけた自分らしい暮らし	池上輝
12	【十人十色】 障害を抱えながらも ポジティブに描き続ける想い	秦ひとみ(こっちゃん)
14	多様なニーズに応える姿勢と 地域密着の強み	株式会社アズ・コンストラクション
16	誰かの人生に「伴走」する	アクサ生命保険株式会社
17	前向きに生きていければ なんとかなるけん	合同会社 awesome voice
18	【ともに歩む】 別府から広がる自立生活の挑戦	自立生活センターぐつとらいふ大分
19	【ともに歩む】 内装のプロフェッショナル	AXIS (アキシス)
20	【ギフト・文化コーナー】 贈り物におすすめの商品や、書籍や文化に関わる 「本読み人」のおすすめ本の紹介	
22	【編集後記】	

※本誌には一部PRが含まれています

小さな一粒から大きな物語へ 新たな未来地図を障害当事者の手で描く

豆塚エリさん NPO法人こんべいとう企画 理事長

「小さな声」から始まった試みは
言葉にならない思いを
伝えようとする勇気を纏って
きらきら きれいな金平糖になる
ふたつとない優しい色
かけがえのない個性的な形
わたしを含めた誰かのために
今日もわたしは生きていく

PROFILE 豆塚エリ(まめつか えり)

詩人・エッセイスト。大分県在住。16歳の時に自殺未遂。頸髄を損傷し車いす生活に。2013年にこんべい出版を立ち上げ、自費出版を開始。2016年よりNHKハートネットTVコメンテーターなど務める。2022年、エッセイ「しにたい気持ちが消えるまで」を出版し大きな反響を呼ぶ。執筆活動、自殺予防の全国講演を行う。2023年、障害者の就労支援を行うためNPO法人こんべいとう企画を立ち上げる。

障害を抱えた人たちが “書く”ことを通じて 社会に参加し、学びあい、 企業や地域とつながる 機会を作りたい

10年ほど前、雑誌の編集という仕事に憧れを抱いていた私は『コンペイトー』という名前のA5サイズの冊子を作っていた。テーマは「お隣文学」。身近にいる友人や近所の人、あるいはたまたま喫茶店で顔見知りになっただけの人たちにペンを握ってもらい、ちょっとした文芸作品を書き集める試みだ。若さゆえの勢いと熱意で始めた企画だったが、意外にも11巻まで発行できた。市販の文芸誌とは違い、書き手は必ずしも文才があるわけではない。それでも、誰かが心の奥底で思っていることや、小さな日常の気づきを文章にしてみようと、その人の輪郭がいつそう鮮明に浮かび上がり、どこか心に残る味わいがあった。

なけなしの資金が底をつくまで続いた

『コンペイトー』は、3・11の被災を経て大分に移住してきた人の体験記や、盲目の男性の日常を捉える女性カメラマンの写真、不登校の女子高生が描いたイラスト、ずいぶん年を重ねてから自分の生きづらさが発達障害だったと気づいた初老女性の詩など、多様な「声なき声」を収める場となった。当時は「障害」「福祉」を前面に打ち出していたわけではない。けれども気づけば、車いすユーザーの若者や、精神的な悩みを抱えて一時休職していた人まで自然に参加してくれていた。そうした背景をもつ人々の文章が集まるうち、「小さな声」の灯火が私の周りでひそやかに燃え始めたように思う。

ところが、その頃の私にとって『コンペイトー』は、まだ自分の内面をさらけ出す場ではなく、ではなかった。私は16歳のときに自殺を図り、頸髄を損傷して車いす生活を送るようになったが、そのことを正面から文章にするのは怖かった。障害を抱えた自分の痛みや苦しみを、人前にさらけ出すわけにはいかないと感じていたのだ。同時に、「私のような存在も町にいるのだ」と知ってほしい気持ちもどこかにあった。そうした相反する感情の揺れこそが、『コンペイトー』づくりの原点だったのかもしれない。

車いすになった当初は、「人の役に立たなければ生きていく意味がない」という思い込みで自分を追い詰めていた。若さゆえの

焦りもあり、通勤や外出の障壁も大きいか、障害者年金を貰いながら家に閉じこもって暮らすことが申し訳なく思えたのだ。しかし、福祉制度を利用してサポートを受けながら自身の生き方を見つめ直すうちに、「社会から求められないなら、とことん好きなことをやろう」と開き直れるようになり、読書や創作活動に没頭することで少しずつ社会との接点が生まれた。そして「障害があっても生きていい。自分が悪いのではなく、社会にも問題があるのだ」という新しい視点が、心に根づいていった。

とはいえ、障害を抱えたまま社会生活を送るのは今も楽ではない。特に地方都市はバリアフリー化が遅れているため、通勤や外出そのものが高いハードルになりがちだ。さらに女性であることで、体力面や家庭環境など、さまざまな要素がからむ。しかし、コロナ禍によって急速に普及したリモートワークは、私たち障害当事者に新たな道を示してくれた。職場に毎日出向かずとも執筆やオンラインミーティングで社会に参加できると知ったとき、「これなら自分にもできそうだ」という光が差し込んだのである。

その後、私は「しにたい気持ちが消えるまで(三栄)」という自伝的エッセイを出版し、自分の問題や、それをどう乗り越えたか(あるいは乗り越えられなかったか)を記した。

なのだから。

企画の理事長として、再び『コンペイトー』という雑誌を作ろうとしている。今度は初めから、障害当事者のライターや、過去にうつ病や不登校などで社会との接点を失いかけていた人たちに積極的な声をかけるつもりだ。町の中にあふれる企業やお店を取材し、人びとにインタビューを行い、記事をまとめる。リモートツールも活用して、「合理的配慮」を最大限取り入れながら、自分のペースで社会に触れてもらう仕組みを整えたい。一人ひとりが「ここまでできるんだ」と感じられるようになるのが理想だ。

取材を受ける企業やお店にとっても、障害当事者との関わりを深めるきっかけになることを願っている。法定雇用率が上がり、世の中が障害者を受け入れるムードになっている今、「具体的にどう進めればいいのか？」と悩む企業も多いだろう。そこにこの雑誌が「はじめの一歩」として橋渡しになり、「こんなふうに考え、行動できるんだ」と知ってもらえれば嬉しいし、実際の雇用やバリアフリー化へ前向きにつながるかもしれない。

ただ、書いてくれる当事者ライターへの報酬は絶対に欠かせない。障害者アートや障害者労働が安価なものとして扱われがちな現状を変えたいからこそ、スポンサーを募り、きちんと対価を支払う仕組みを整えるのは私たちNPO法人の役目だ。人が持続的に取り組むには、経済的な基盤が必要

かつての『コンペイトー』からずっと、私の思いは形を変えつつも根っここの部分は変わらない。誰かの胸の奥にある言葉にならない思いを丁寧に拾い、自分なりの筆致で社会に放ってみる。そこから何かが生まれるかもしれないという、ささやかな期待。それがずっと私の背中を押し続けてきた。障害当事者が町に出て、共に働き、暮らす未来を夢見ながら、私は今日も車いすをこぎ、ペンを握り、新しい『コンペイトー』の創刊準備を進めている。金平糖のように、一つひとつの声をかけがえのない一粒として育て、紡がれた物語の先で、もっと優しい社会の風景が広がっていくことを願ってやまない。





作業手順がわかりやすいように鉄板に目印をつけたり、グラム数を数値と図で示した表を作ったりと、工夫を施しているおかげで、特性や得意・不得意が違う仲間たちも、それぞれが活躍できる持ち場を見つけやすくなったという。

Web



Instagram



べっふ優ゆう
住所 / 別府市内竈1256-10
TEL / 0977-27-6333
営業時間 / 月～金曜日 8:30～17:30
定休日 / 土・日曜日

「手間ひまと素材への想いが詰まった一枚
——べっふ優ゆうが届ける至福のクッキー」

国産小麦の香りがふんわりと広がり、奄美産さび砂糖のやさしい甘さに思わず頬がほころぶクッキー。そんなこだわりの味わいを生み出すのは、社会福祉法人「べっふ優ゆう」。賞味期限が約2か月と短いのは、保存料を使わず、赤ちゃんからお年寄りまで安心して食べられることを目指しているから。生地作りから成形、袋詰めに至るまで、すべて手作業で仕上げるため、手間ひまが惜しみなく注がれている。

ココアやマールといった定番のほか、桜やスノーボール、節分にちなんだ「おにクッキー」など見た目も楽しい季節限定も充実。NPO法人「BEPPU PROJECT」の「コラボ」おおい建策クッキー」や道の駅「たのうらら」限定商品も展開し、地元のお土産として人気を集めている。

20年以上愛されるクッキーを作っているのは、障害のある利用者（仲間たち）。彼らにとって大切なのは、「おいしかったよ」という声を励みに、新しいアイデアを形にする創意工夫と職人の気概。生産量は多くないが、素材と技術に妥協しない姿勢が一枚一枚のクッキーに凝縮されている。贈り物に喜ばれ、リピーターも多い理由は、その真つすぐな想いと品質の高さにある。

さらに、地元の酒パックを再利用した手漉き紙も製造し、クッキーのパッケージにも活用。「全種類のクッキーが揃うのは事業所だけ。事業所限定商品もありますので、ぜひいらしてみください」と職員の黒田さん。ギフトセットの注文も可能で、こだわりの詰まったおいしさと温もりを体感できるのは、ここならではの魅力といえる。

ENJOY
WORKING
interviews & information

1

べっふ優ゆう「思わず頬がほころぶこだわりのクッキー」

ココア・ピスタチオ
濃厚なココアに
ピスタチオの食感がアクセント
根強い1番人気の商品

白コロ クッキー
フワッとサクッとホロッと
冬にしか味わえない食感

うみのいきもの クッキー
塩味と甘味がなんとも絶妙！
子供から大人まで楽しめる
止まらぬ美味しさ

米鬼のおたから
大分名産ザボンを甘酒で
丁寧に煮詰めあしらった
ホロサク食感のクッキー

米鬼のかなぼう
仲間みんなで一本一本丁寧に
生地を転がし伸ばして作る
ホキッカリ食感

季節のクッキー

うみのいきものクッキー

アーモンド チュイール

或る焙煎所 「最高の一杯をつくるために」



珈琲店とはせずに、
あえて焙煎所という名にしたのには理由がある。
最高の一杯をつくるために、
最高の豆を、最高の形でお届けしたい。
そのこだわりがここにある。

「最高のコーヒーを提供するために」

2024年8月に大分市長浜にオープンした珈琲スタンド「或る焙煎所」。

ここ「或る焙煎所」は、大分市の福祉企業「株式会社ARU」が手掛けており、自家焙煎した豆をひとつひとつ手作業で選別し、袋詰めからシール貼り、ラッピングなど、商品になるまでの全ての工程を丁寧にしつかりと時間をかけて行っている。

店内に入ると、一番に目に飛び込んでくるのは、大きなオブジェのような迫力ある焙煎機。この焙煎機は100種類程のプログラムの中から、その豆に合った最適な温度・風量・時間をコントロールし、焼きムラのない最高の焙煎を可能にする。

ここで焙煎された豆を使った代表メニューが「或るブレンドコーヒー」ブラジル、タンザニア、

ホンジュラスで生産された3種類の豆をブレンドし、深煎りに焙煎して仕上げたもので、リッチな質感と深いコクを味わえる至福の一杯となっている。このほか、芳醇な香りを堪能できる「スペシャルティコーヒー」や、口当たりの良いカフェラテなど(約15種類のビバレッジ)を取り揃えており、メニューが豊富なのも嬉しい。また、自家焙煎したこだわりのコーヒー豆やドリッパバッグも、店頭はもちろん、オンラインショップでも購入できる。

「オープン以来、地域との繋がりが深まっていることを実感している」と、店長の赤木さんは話す。「或る焙煎所」は、安らぎとくつろぎの時間を地域から発信し続けている。



Web



Instagram



テイクアウト専門 自家焙煎珈琲 或る焙煎所
住所/大分市長浜町1丁目7-6 塩九升ビル 1F
TEL /097-576-9599
営業時間/10:00~16:00 (祝日は12:00まで)
定休日/日曜日 ※土曜日の不定休あり
※Instagramで営業日を確認の上ご来店ください
P/3台あり



十文字原展望台

別府市大字野田字池ノツル1200

市街地はもとより大分市、国東半島、遠くは四国まで望むことができる。夜景も美しく、「日本夜景遺産」「日本夜景百選」に登録されている。「初めて別府の夜景を見に行った時の衝撃は、「ここに住みたい」という想いを一段と強くしました」と池上さん。



信州そば処 そじ坊 別府ゆめタウン店

別府市楠町382-7 ゆめタウン別府1F

お気に入り「カレー南蛮そば」。出汁の効いたところみのあるカレーつゆが細い蕎麦に絡む。「別府のお店はどこに行っても気軽に手伝ってくれて嬉しいですよ」。

大分にゆかりのある障害当事者が、これから楽しく生きていくために今、取り組んでいることや大分のおすすめスポット等を紹介します。

Hikaru Ikegami

池上輝さん

親元を離れ、別府市での自立生活を始めた池上輝さん。
四肢麻痺という重度の障害を抱えながらも、
自立生活運動に邁進し、街歩きや国際交流など
エネルギーな活動を展開。
新天地・別府で見つけた、自分らしい暮らしとは何なのか――。
その一歩を踏み出し続ける池上さんの、いまに迫りました。



池上 輝 いけがみ ひかる

出身：熊本県熊本市北区植木町
障害：頸髄損傷と内部障害
前職：カフェ経営(店長)
現職：NPO法人自立支援センターおおい
資格：社会福祉士(2014年取得)
趣味：撮影(撮られる人)

オリンピックという夢を絶たれて

13歳の時、柔道の練習中に頸椎を損傷し四肢麻痺となった池上輝さん。幼少期から父親の影響で柔道一筋、将来はオリンピックを目指していたが、その夢は突然断たれた。1年間にあつた入院生活を経て、首から下が動かない身体で復学を余儀なくされる。思春期のさなか、母親の同伴なしには学校に行けない状況は、友人関係にも大きな影響を与えた。しかし、移動の際にクラスメイトが車いすを押してくれたたり、日直日誌を書けない池上さんの代わりに「俺がお前の手になってやる」と友人がペンを握ってくれたり。最初は疎遠になりかけていた仲間たちとも、むしろ以前より深く結びつくきっかけになった。

就職の壁と家族との時間

大学では福祉を学び、社会福祉士の資格を取得した。しかし卒業後、就職先を探そうにも「四肢麻痺で働ける環境」はなかった。そんな状況を見かね、両親と「障害があつても働ける場所」と、就労継続支援A型作業所

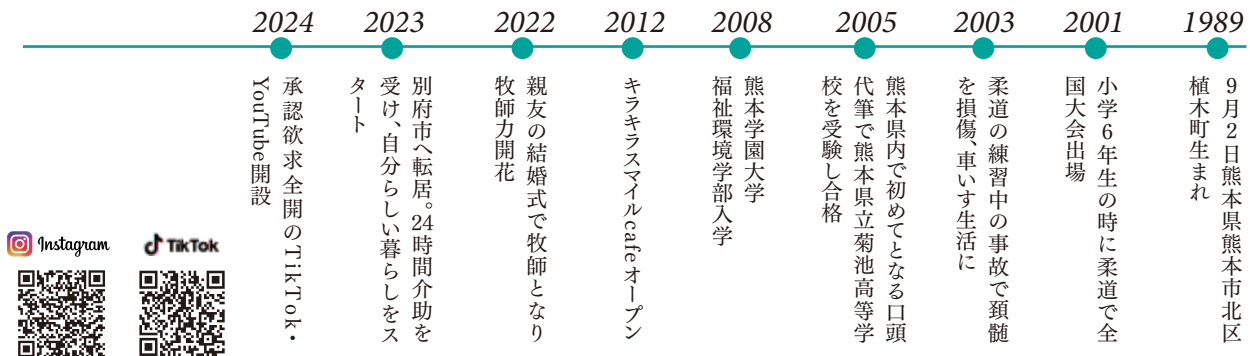
自分らしい生活を求めて別府へ

「キラキラ・スマイルcafe」を立ち上げ、車いすで接客や配膳に挑戦した。お客さんがその姿を見て「身体が不自由であっても働けるんだ」と驚き、「障害があつても夢はあきらめなくていい」と勇気を感じてくれた。この10年間にわたるカフェ運営は、池上さんにとって社会参加の大きな一歩だった。一方で、母親の介助を受けながらの生活は「親の自由を奪っているのでは」と悩み、同時に、姉や弟が甘えたい時期に母親を独占してしまったのではないか、という後ろめたさもあった。

やがて転機は訪れた。熊本での24時間の介助体制が整わない環境では、たとえ2〜3時間のヘルパーの不在でも、助けを呼べず命の危険を感じることも。「自分らしく生きるためには、24時間介助が必要だ」――そう決意し、別府への移住を決行。家族はむしろ背中を押してくれた。今でも家族がそれぞれに歩み寄り、互いを思いやる関係が続いている。

別府ではNPO法人「自立生活センターおおい」に所属し、障害者が

LIFE HISTORY



「障害があつても」広がる夢と可能性

現在の目標は、障害があつても、自由に生活を楽しめる環境を広げること。海まで10分で行ける別府に住み、夜には湯けむり漂う街へ出かける環境は、以前では考えられなかった充実感をもたらす。

さらに池上さんには、新たに叶えたい夢がある。それはパラグライダーで空を飛ぶこと。「障害があるから無理」と決めつけず、「障害があつても楽しむ方法を見つけた」と考える姿は、まさに彼自身が信じる「自分らしく生きる」というスタイルそのものだ。「自分が笑顔で生活する姿を見せることで、きつと周りも勇気づけられるはず」周囲を明るく照らすその笑顔が、多くの人へ「一歩を踏み出す力」を与えている。

地元大分を拠点にイラストレーターとして活動している「こっちゃん」こと、秦ひとみさん。障害を抱えながらもポジティブに描き続ける彼女の、イラストに対する特別な想いを伺いました。

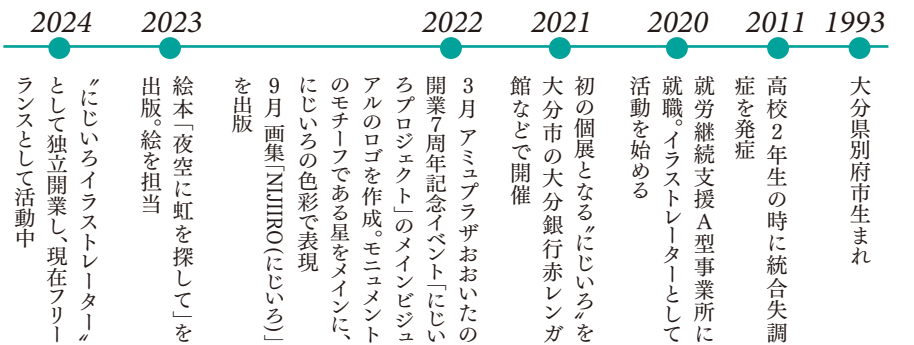


秦ひとみ しんひとみ

●イラストレーター
●活動名「こっちゃん」
大分県在住。企業とのコラボや個人からの依頼などを受けてイラストを制作。「にじいろの魔法」をコンセプトに、雨上がりの虹のような優しく温かい世界観を描く。



LIFE HISTORY



イラストとの出会いは ドラマティック

水彩絵の具にアクリルガッシュやコピックなど様々な画材でパステルタッチに描かれた「にじいろイラスト」は、イラストレーター「こっちゃん」の代名詞である描法。水彩絵の具でパステルタッチに描かれたその絵は、見るものに安堵と優しさをもたらす。

「こっちゃん」が絵を描くきっかけとなったのはドラマティック。まだ幼稚園に通っていた「こっちゃん」が、門司港に家族旅行に行った時のこと。港で風景画をスケッチしていた中年の男性、その絵に幼心ながら一瞬で魅入られた。軽快なタッチで生まれていく一枚の絵に胸が躍った。「わたしも描いてみたい」小さな女の子が熱心に見ていることに気づいたその男性は、「絵が好きなの？鉛筆...あげようか」と、持っていた黒鉛筆をそっと手渡ししてくれた。その瞬間、「こっちゃん」のイラスト人生の歯車がゆっくり回りだした。最初は、漫画やアニメの模写から始まった。描いた絵を友達や家族にあげると喜んでくれた。

「絵を描くことはなんて楽しいんだろ！みんなが、私が、笑顔になる！」

虹色に描かれた 想いと願い

2011年、高校2年生の時に、過度のストレスから統合失調症を発症。幻聴や幻覚に悩まされ、登校や一般生活が困難になった「こっちゃん」。その苦しい状況下で大きな支えとなったのは、幼少時から描いてきた大好きなイラストだった。闘病中は無心に描いた。出来上がったイラストが喜んでもらえる、自分を受け入れてもらえたという温かい感覚に包まれ、苦しい気持ちから何度も救われた。そうした中、誕生したのが「にじいろイラスト」。今はどしゃぶりの雨でも、いつかは必ずその雨は上がり、その向こうには七色の綺麗な虹が現れる。だから大丈夫！私もそうなりたいと思いを馳せて、願って、虹色のイラストを描き続けた。そして現在も、この美しいイラストで癒しと幸せを発信している。

これからの夢

「障害者への世間の理解はだいぶ変わってきてはいるけれども、それでもまだまだ先入観が先行しているのが現実ですね」と話す「こっちゃん」。今も統合失調症の症状が残る「こっちゃん」は、障害者であることは隠さず、それも自分の個性として捉えて前向きに活動をしている。「人は敵意を向ければ敵意となつて返ってくる、でも好意を向けると好意となつて戻ってくる、それはすごく実感しています。何事も否定から入らず、わかり合おうと試みると、相手を思いやる優しい世界で満たされるんですけどね。そうしたらきっと残酷な争いはなくなるんじゃないかなと思うんです」そう語る「こっちゃん」は、常に誰かの幸せを願っている。その想いがイラストに乗り、希望となつて多くの人に届くのだろう。それが「こっちゃん」のイラストの根幹にある。

現在、大分県内の民間企業や行政機関からの仕事の依頼も増え、順調にイラストレーターとしての実績を積み上げ続けている「こっちゃん」。就労継続支援事業所での勤務を経て、2024年にフリーランスとして独立開業。もっと多くの方々に自分の絵を見てもらいたい！世界を虹色に染めて、誰にとっても優しい社会の一部になりたい！と目を輝かせて語る。福岡・大阪・東京での個展開催、そしてその先には世界進出！夢は膨らむ。



コモールカフェ

別府市駅前本町9-7 高崎ビル1F

別府駅近くにあるコワーキングスペース。主に打ち合わせの時に利用しており、一人でも集中して作業ができるので自宅での作業に行き詰まったときはここに来ると捗ることもあるそう。フリーランスにはありがたい場所だ。



明石文昭堂

別府市駅前町11-10 アークヒルズ

イラストに使う画材や文房具は主にここで購入。明石文昭堂でしか手に入らないインクやグッズもある。おすすめは、明石文昭堂オリジナルインクの「湯けむりミストブルー」。別府にお越しの際はぜひ。

「きれいなおうちより、
やわらかいおうちのほうがいいよね」

まっ白な漆喰と無垢材のぬくもりが、
家族の思い出をそっと包み込む。
住まいが日々の幸せを育む「milkuchen(ミルクーヘン)」。



多様なニーズに応える
姿勢と地域密着の強み

同社では、多様な家族構成やニーズに柔軟に 대응することを大切にしている。たとえば車いすを利用される方や、寝たきりのご家族がいる場合でも、まずは「できる方法」を考える。大規模ハウスメーカーは自社既製の強みを出しながら提案をしていくが、アズ・コンストラクションでは疎遠されやすい要望も柔軟に対応する。「こんなことができるなんて思わなかった」と喜ばれた経験もあるという。完成後も定期的に点検やメンテナンスを行い、住み始めてからの不便や暮らしの変化にきめ細かく寄り添い続ける。地域に根ざしているからこそ、こうした長いお付き合いが可能になるのだ。

サステナブルな暮らしと
コミュニティづくり

自然素材の木質繊維断熱材、漆喰や無垢材などを積極的に取り入れ、住まいをサステナブルに保つ工夫にも力を注いでいる。生産・解体時に出る産業廃棄物を少しでも減らすため、環境負荷の小さい資材を選び、古い家具をリメイクするなど「使えるもの」を大切に活かす「姿勢も貫いている。また、地域に増えつつある空き家をコミュニティス



株式会社アズ・コンストラクション
代表取締役社長
二宮 和敏さん



アズ・コンストラクション
手作りの白い家 milkuchen

「敷居をもっと低く」 家づくりへの思い

「家づくりの敷居をもっと低くしたい」
——そう語るのは、大分市の工務店アズ・コンストラクションの代表取締役社長・二宮和敏さんだ。家づくりは人生における大きな転機といえるが、従来は住宅展示場を巡り、営業主導で話が進むことが多かった。そこで二宮さんは、「家族にとってより身近で、心に残る家づくりを実現したい」という理念を掲げている。

その想いを象徴するのが、白い漆喰の壁と木のぬくもりが印象的なブランド「ミルクーヘン」だ。ドイツ語の「Milch(ミルク)」と「Kuchen(ケーキ)」から生まれた造語で、ケーキを飾るように家づくりを楽しんでほしい、という願いを込めて

いる。建築が始まる前から思い出づくりを始めることで、完成時には「家族のストーリー」が詰まった大切な居場所に仕上げることを目指す。

「二つのブランドが目指す」 家族の幸せ

アズ・コンストラクションには、もう一つの住宅ブランド「Live Sumai(リブすまい)」もある。パナソニックの「テクノストラクチャー」工法を採用し、さらに安心できる「器」の提供を重視している。家族一人ひとりのライフスタイルに合わせて、「強く・愉しく・紡ぐ」すまいづくりを提案する姿勢は、ミルクーヘンと変わらない。自然や先人の知恵や想いを受け継ぐのか、最新技術による未来を導入するのかという違いはあっても、「家族が幸せに暮らせる家づくりを二人三脚で行う」という点は同じである。

自然由来の素材を積極的に取り入れることで、
日々の暮らしで自然と呼吸する「家になる」。
機械に頼らず、素材の力を活かし、
夏は涼しく冬は暖かくする。
「愛着をもって長く使う、大事にすることこそ
本当のエコロジーだと二宮代表は考える。」



昔の家具や、おばあちゃんが大切にしていたテーブルを、そのまま新築に持ち込むケースも多いという。家の中に「古い物が持つ味わい」を取り入れると、世代を超えてつながるあたたかさが生まれる。そういう人間らしい柔らかさこそ、家が持つ本質的な魅力だ。



ペースに改修し、イベントやスタートアップの拠点として活用する取り組みも進行中。住まいをただの器で終わらせず、人と人がつながる場へと育てていくことで、「家を中心に地域を元気にする」循環を目指している。

企業理念は「感謝・感動・信頼」と、その「循環」。建てた家もたらす感動や、人を思いやるやさしさはやがて信頼へとつながり、その連鎖が地域全体を豊かにしていく。大規模ではないからこそ大切にできる近い距離感で、家づくりだけでなく暮らしづくりに向き合い、多様な家族を支え続ける——それがアズ・コンストラクションの歩みである。

株式会社アズ・コンストラクション
住所/大分市大字津守490-45
TEL/097-529-9888
営業時間/9:00-17:15
定休日(営業・設計)/水曜日、第1・3・5火曜日





合同会社 awesome voice 小川弘晟さん。

介護サービス LINK
住所/別府市野口元町3-24
看護サービス Aoi
住所/大分市須賀1丁目9-32
TEL/0977-76-8146



「前向きに生きていればなんとかなるけん」 合同会社 awesome voice 小川さん

「今、めっちゃ幸せなんです！」
とびきりの笑顔で話す彼は24歳の小川弘晟さん。別府市の訪問介護事業所「介護サービス LINK」で広報を担当している。

先天性の重度身体障害者としてYouTubeやSNSを通じて発信を行っているが、かつては内向的で、親に従うばかりの少年だった。そんな彼の転機となったのが、介護サービス LINK と看護サービス Aoi の運営を行う合同会社 awesome voice で代表を務める、佐野貴大さんとの出会いだ。重度身体障害者でありながら、富士登山や海外視察など、いきいきと活動する姿に憧れた。

ADL（日常生活動作）を自宅で習得すべきと考える両親に対し、重度障害者リハビリセンターに入所し早く就職したいと、初めて自分の思いをぶつけた。努力を重ね、短期間でADLを習得し就職。自分だからこそのできる障害者支援を考え始めた折、佐野代表の手がける介護サービス LINK の「まずは自分から」の理念に共鳴し、転職を決めた。

LINKの良さは「従業員が幸せそうなこと。自分の幸せも大切しながら、利用者様の人生を考える介護士の姿を伝える仕事ができ幸せです」「まずは自分から」の行動がプライベートにも影響を与え、最近、婚約したという。

「前向きに生きていればなんとかなるけん」、障害のある方も無い方も心に行き詰まったら、ふらつとLINKに寄ってみたなら、「幸せ」へと案内してくれるはず。

誰かの人生に“伴走”する アクサ生命の「ライフマネジメント®」

執行役員 アクサFA推進本部長の山内康晴さん。
生涯のアドバイザーとして伴走する。

アクサ生命担当者の思いをストーリーとして紹介した
配信動画には、山内さんも制作に携わっている。

アクサ生命保険株式会社
大分FA支社
住所/大分市高砂町2-50
OASISひろば21 3F
TEL/097-513-5702



日本は今、人生100年時代。生き方も多様化し、長い人生の中で様々なライフイベントの乗り越え方に悩むこともある。そうした時、人生の将来設計に合わせた計画的なライフプランニングがあれば心強い。注目したいのが、アクサ生命の「ライフマネジメント®」だ。ライフマネジメント®は、人生の目的やビジョンを重視。その目的を達成するためにいつ何を達成したいかという「目標」を設定し、実現のための「ライフプラン」をFA（フィナンシャルプランアドバイザー）と作成する。

生命保険は「売りつけられる」という印象が強いが、執行役員 アクサFA推進本部長の山内さんは業界の常識を変えたくて、ライフマネジメントコンサルティングを開始。「ライフマネジメント®」、「人生を経営する」を商標登録したのは「お客さまの人生に伴走するパートナーでありたい」という覚悟の表れだ。

少子高齢化や貧困化が進む日本は、課題先進国。先行きが不透明で今後はさらに自分で人生の舵を切り、心身を守る必要がある。「ただ、ひとりで将来を逆算して今を見直すのはなかなか難しい。考え方を『将来思考』にする場として、気軽に私たちが頼ってほしいです」

誰もが自分らしい人生を経営し、生きていくことが当たり前の社会に――。山内さんの願いは誰とも生き方を競わなくていい今の時代、深く刺さる。私は何を「人生の目的」にしたくて、どんな豊かさを幸せと感じるのか。アクサ生命のライフマネジメント®は、そんな気づきも授ける。

※脚注「ライフマネジメント®」はアクサ生命保険株式会社の登録商標です。



確かな技術と豊富な経験が、お客様の
思いをしっかりと形にしていく。安部さ
んが手掛ける仕事の背景には、優しさ
と笑顔が溢れている。

AXIS (アキシス) 代表 あべ かつみ 安部 克巳さん



AXIS (アキシス)
住所 / 【大分】大分市大字下判田163-2
【別府】別府市野口元町4-21
TEL / 090-4515-9597

超高齢社会となった近年は、お客様のニーズも変わってき
ているそうだ。一般住宅や店舗の段差解消、手すりの取り付
けなど、高齢者や障害者向けのリフォームが増えてきてい
ること。介護士の資格も併せ持つ安部さんは、バリアフリー
などの福祉に造詣が深いこともあり、その世界では期待以
上の施工を提供し、お客様の満足度が高いと評判である。
イメージはできても、言葉にして施工業者に伝えるのはな
かなか難しい。安部さんは長年の経験と実績から、お客様の
「こんなふうになりたい」という要望が感覚でわかるという。「そ
うそう、そんなふうにしたかったんよ」と喜ばれることが何よ
り嬉しいと、安部さんは微笑む。

「内装+福祉」AXISという強み

AXIS (アキシス) の代表を務める安部さん。内装業二筋
40年あまり。大分県でも指折りの職人だが、会社のWebサ
イトなどはない。口コミでの仕事の依頼がほとんどで、知る人
ぞ知る業界きつての名工といえる存在だ。これまでにアミュー
ラザをはじめ、小倉井筒屋、スターバックス、ロッテリア、マクド
ナルドなどの有名企業の店舗内装のほか、一般家庭の住宅内
装やリフォームも多く手掛けてきた。仕事の依頼の多くはリ
ピーターであるということからも、安部さんの仕事のクオリ
ティには定評があるということがわかる。

「内装のプロフェッショナル」



「32年前に今のアパートに住み始めた
ことが自分の人生に大きく影響した」と
丸子さんは語る。「ここに住んでい
るからこそ、今の自分がある」



ぐっどらいふ大分
住所 / 別府市亀川浜田町33組18-4
サクセスハイツマルコ101
TEL / 0977-75-7775

ぐっどらいふ大分 代表 まるこ ひろし 丸子 博司さん



好きな場所で生きる権利を支える
——別府から広がる自立生活の挑戦——
大分県別府市に拠点を置く自立生活センター「ぐっどらい
ふ大分」は、重度障害者が地域で自分らしく暮らすための支
援を行う団体だ。代表の丸子さん自身、42年前に交通事故
による頸髄損傷で車いす生活を送る。当初は別府重度障害
者センターで出会った仲間と建てたアパート「サクセスハイ
ツマルコ」で暮らしながら「どんなに重度の障がいがあっても、介
助者を活用すれば自立できるはず」と感じ、研修や活動を重
ねてきた。2005年の設立以降、重度訪問介護制度の拡充
を国や自治体に訴え続け、体験宿泊やピアカウンセリングな
どを取り入れた自立生活プログラムを実施。親との同居を
経て一歩踏み出せない人にも、少しずつ練習しながら「人暮
らし」を実現できるようサポートしている。「障害は誰にでも
起こりうる。本人と周囲が互いに尊重し合い、制度を学んで
行動すれば、重度障害者でも地域で当たり前暮らせる」と
丸子さん。また、「介助者を確保するためにも、待遇改善の体
制づくりをとともに訴えていかねばならない」とも語る。
コロナ禍で交流イベントや研修に制限がかかった時期も
あったが、会報「ぐびあ通信」の発行などを通じ、当事者や家
族へ情報を届け続けてきた。その積み重ねが、丸子さんと仲
間たちの原動力となっている。「何年かかっても、自立を望む
当事者に寄り添い続ける。この拠点から、重度障害者が地域
の当たり前風景として生きられる社会を実現するための
チャレンジは続く」と丸子さんは呼びかける。



わたしのイチオシ！ Book Review



新たな
“お気に入り”が
見つかるかも?!

地元の本読みの方に、おすすめの一冊を選んでもらいました！

私をご紹介します



書肆ゲンシシャ
店主
藤井 慎二さん

驚異の陳列室をテーマに古今東西の珍品・珍本を蒐集するゲンシシャを運営。「ムー」に連載中。「TOCANA/トカナ」「ソトコト」「ダ・ヴィンチ」「POPEYE」「BRUTUS」「BAdi」「サイゾー」に掲載される。



自閉症の僕が 見ている景色

自閉症の13歳の少年が、自らの自閉について、わかりやすく、丁寧に説明したエッセイ。自閉症の子どもを育てるイギリスの作家が妻とともに英訳して日本を含め世界でベストセラーとなり、映画化もされた。「自閉の世界は、みんなから見れば謎だらけです。少しだけ、僕の言葉に耳を傾けてくださいませんか」

『自閉症の僕が跳びはねる理由』東田 直樹 KADOKAWA / 角川文庫

私をご紹介します



ビブリアフィル書店人
ゆーたろーさん

和洋、老若男女、オールジャンルの本を読み漁り続ける。まさに本に取り憑かれた書店人。膨大な知識量の彼が薦める本は、どれも魔法がかかったように面白い！



すべての、 白いものたちの

2024年ノーベル文学賞受賞作家のハン・ガンによる、存在と喪失を描いた小説。生まれてまもなく亡くなった姉と、姉が生きていなければ生まれなかったであろう私。自分の中でくすぶり続ける姉という存在と向き合うため、私は「白いもの」について書くことに決めた。ハン・ガンの最初の1冊としてもおすすめ。

『すべての、白いものたちの』ハン・ガン 河出書房新社

私をご紹介します



詩人・エッセイスト
豆塚 エリさん

詩人・エッセイスト。自己の経験を見つめ直し、「生きづらさ」や「死にたい気持ち」をテーマにした著作「しにたい気持ちが消えるまで(三米)」で広く共感を呼び起こした。自らの体験に基づく寄り添う言葉で、多くの読者を励まし続けている。



溺れそうな夜に、 そっと言葉で呼吸を。

書く行為は生きづらさと同じ居ながらも、自分の「在り処」を見失わないための指針となり得る。「綴ることは、息継ぎすること」。息継ぎは苦しいけれど、それでもしなければ溺れてしまう。日々に追われてくたくたになった夜や、些細な一言がどうしても気になって眠れない夜に、ベッドの中でこの本を開いてほしい。そっと息を吸うために。

『感情の海を泳ぎ、言葉と出会う』荒井裕樹 教育評論社



大切な人へ・大切な取引先様へ・ 自分自身へ贈る「香りのギフト」



スティックによって香りが拡散するシステムを利用したルームフレグランス。

価格：500ml 15,950円(税込)～

KOHARU コハルー が心からお勧めする日常生活・オフィスシーンに寄り添う上質な贈りモノ・自然由来の香りのギフト、それがイタリア・フィレンツェ発のルームフレグランスブランド「ドットール・ヴラニエス」。至福の香りが織りなす唯一無二の贅沢な空間と時間を。ディフューザー(12種類の香り)、カーパルフラム(6種類の香り)などを品揃え。お気軽に正規販売店 KOHARUまでお問い合わせを。



KOHARU コハルー

⑤ 大分市生石2-3-20
☎ 097-532-6089
🕒 11:00～19:00
📅 木曜日(祝日は営業)

春のギフトにぴったり！ 簡単スタイリングの新定番



ストレート、カール、ボリューム、前髪、寝癖までおもいのまま。髪をいたわりながら手軽に使える一台。
価格：18,700円(税込)

地元化粧品店の老舗・AKIYOSHIのお勧めは、「メデュラックス コームアイロン」。25枚のプレートが一体化したコーム型ヘアアイロンで、セラミックコーティングで髪を優しくキャッチし、ストレートもカールも簡単に仕上がる。挟むタイプと違い、髪をとかすだけでスピーディーにセット完了。火傷の心配が少なく、コンパクトで持ち運びも便利。忙しい朝や新生活に役立つ、春の贈り物におすすめ。



AKIYOSHI SIS AKIYOSHI

⑤ 別府市北浜1-4-4やよい天狗通り
☎ 0977-22-4216
🕒 10:00～19:00
📅 日曜日(SISは日・月曜日)



イラスト・デザイン・写真
小野 雄一
(こんぺいとう企画 理事)

『コンペイトー』の制作では、デザインとイラストに加えて、カメラマンとしても関わらせてもらいました。撮影では、自然な笑顔を引き出そうと話しかけたり、うまく撮れずに再撮影をお願いしたりと、なかなか奮闘(笑)。でも、その一瞬一瞬に詰まった「らしさ」を形にできたのは、本当に楽しい経験でした。イラストでは、取材させていただいた方々の笑顔を表紙に取り入れ、カラフルな色彩で表現しました。いろんな個性が集まって、まるで虹のような世界になる。そんな日常を目指してます。



GEOGRAPHIC.
KENJI INOKUCHI DESIGN SPACE
デザイン 井口 健司

この一冊のデザインを通じて、「誰もが共に暮らす町の魅力」をどう表現できるかを考え続けた時間でした。取材の温かい言葉や、写真に映る生き生きとした表情を、紙面のレイアウトや色彩でどう伝えるか。悩みながらも、関わるすべての人の想いを形にする楽しさを感じました。『コンペイトー』が、手に取る人の心をそっと照らすような存在になれば嬉しいです。



ライター
中塚 翔大
(こんぺいとう企画 副理事)

人間関係の葛藤や福祉への違和感を抱きながらも、そういった出来事さえも人生の出会いや決断に繋がっていくと思うと日常が少し楽観的で前向きに捉えられるような、不安感が減っていくような感覚が残るインタビューとなりました。この『コンペイトー』が人と人を繋ぎきっかけになることを願っています。



ライター・編集
豆塚 エリ
(こんぺいとう企画 理事長)

『コンペイトー』は、人と町がつながるきっかけになればと作りました。取材を通して出会った人々の言葉や表情には、その人らしさが詰まっていて、書きながら何度も心が動かされました。「障害がある・ない」にかかわらず、それぞれの暮らしがあり、多様な色が混ざり合って一つの風景になる——そんなイメージを誌面に込めています。この一冊が、新しい発見や、立ち寄りたくなる場所との出会いにつながれば嬉しいです。

今回の号を支えてくださったスタッフの皆さんから、
取材の舞台裏やこれからの想いを語ってもらいました。
まちを誰もが楽しめる場所に——
その願いを胸に取り組んだ日々の足跡を、
ぜひ一緒にのぞいてみてください。



編集 後記

Editor's note



ライター
原山 俊一

いまを輝いて生きている人は、必ずしも最初からそうだったわけじゃない。努力と苦労があつてこそ今の幸せなんだと、今回の取材を通じて改めて実感。私もそうありたいと思うけれども、「あたりまえの普通の日常を過ごせるってことも、とても幸せなことだよ」と一人でうんうんと納得し、私は次の取材先に足取り軽く歩いていく。



ライター
古川 ゆか

本誌の取材にご協力いただいたみなさん、そして発刊のきっかけを生んでくださったみなさん、本当にありがとうございました。多くの人の優しさによって、生まれた一冊だと感じております。自分らしく生きることがなかなか難しい世の中ですが、本誌が心を豊かにする方法を見つけるひとつの機会になれば嬉しいです。今後も様々な生き方や声、叫びと出えることを楽しみにしております。



フォトグラファー
写真家
sayaka yoshioka

今年度で5年間続けてきた介護福祉士を辞め、夢である写真家の道を歩むことを決めました。そのタイミングで、ずっとしてみたかった福祉系の撮影に携わらせていただき嬉しかったです。今後は大分県に根付いたイベントの撮影、素敵なお店や施設等の撮影をしていきたいと思っています。当たり前の幸せを残すことをコンセプトに、お客様の想いにより扱いながら頑張っていけます。



フォトグラファー
August

星空や風景、花などを中心に写真を撮っています。豆塚エリさんの写真をお手伝いすることになり数年が経ちました。お手伝いする中で自分の知らなかった多くの世界を知り、様々な事を考えるようになりました。引き続き少しでも多くの関わった方のお手伝いが写真を通じてできればと思います。

生きづらさを抱えるひとたちが
自分らしくいられる居場所を見つけるために

在 処
arica

NPO法人こんぺいとう企画が贈る、
あなたの“心の拠り所”となるメディアサイト

<https://arica.site/>
2025年 初夏 公開予定

いま、どんなにつらくても
ひとりぼっちでも
あなたがあなたらしくいられる居場所が
きっとどこかにある。
いっしょにさがしてみませんか？

この春、自分の
「ありか」を見つけよう。